

2022年9月4日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「信仰は受け継がれていく」

聖書：士師記2:16～23

「士師」の時代は、かつてイスラエルの民がエジプトを出て、荒野の40年の旅を終え、カナンの地に定住し、まだイスラエルに王がないころの時代。十二部族連合体として国が維持されていたころ。しかしこの時の民は、先祖の信仰を受け継ぐことを忘れていた(2:10)。民は、出エジプトでの神の御業、荒野での不思議な御業、先祖が受けた恵みを忘れ、他国の神々に心奪われて行くのは何故か。

イスラエルの民がエジプトにて過酷な労働を課せられていた中から、不思議な御業を次々に魅せられて出エジプトの出来事があった。また荒野で天からマナが降り、今日一日の必要なパンが一人ひとりに与えられた。先祖が受けた数々の恵みを知る彼らであるが、しかし今、民は他の神々に心奪われて行く。彼らが心奪われて行くもの・・・それは、他国の経済力、武力・・・すなわち“豊かさ”に、心奪われて行くのだった。見るからに美味しそうな果実に目がくらみ(創世記3:6)、レンガやアスファルトという最新技術(創世記11:3)に心奪われて行った。その他国の“豊かさ”、他国の崇拜する神々が、まるで真の神であるかのように思わされて行く。民は、この世の力に神を見てしまう。

士師記は、今の私たちにも信仰の在り方を問う。私たちは、イエスを神として仰ぎ、信仰する者だが、その私自身が、失敗し、貧しくなり、病に伏したりすると、この世の成功者、裕福な者をうらやみ、健康な人、幸せそうにしている人を見ては、みじめさを感じたりすることはないだろうか。私たちは、キリストを信仰する者ではあっても、自分の置かれた状況によっては、いくらでも信仰は揺らぐ。その弱さを認めつつ・・・。されどキリストを仰ぎ、信仰者として歩ませて頂きたい。

私たちは、あの出エジプトの出来事の中に、あの荒野での出来事の中に、私たちは身を置くことはあるだろうか。聖書の出来事の中に自分を置くことはあるだろうか。私たちは、失敗し、貧しくあろうとも、時に思いがけない物を頂くこともあり、慰め、励ましの言葉を頂いて、元気になることもある。今を生かされているのは、荒野の中で思いがけない天からのマナの恵みと重ならないか。不思議と必要が満たされているのは、荒野で生かされていることと同じことではないか。

信仰とは、そのようにして聖書の出来事と、今の私の出来事と重ねて行くことにあり、聖書の恵みを、私への恵みとして、受けて行くことにある。キリストの言葉を、私への語りかけの言葉として聞くことは信仰として大事になる。信仰は、そのようにして育み、そのようにして恵みが増す。聖書の出来事の中に自分を置くこと、自分の身を置く時、私たちは、悔い改めを迫られ、慰め、励まし、勇気を受け、また時に躓きを受けることもあろう。

私たちの信仰は、聖書の言葉の中に生きてこそ、信仰は受け継がれて行く。(神谷)